



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館

小さな好きから 大きな夢中へ ミュージアムパーク

A・MUSEUM

[ア・ミュージアム]

2025.1.15

vol.116



CONTENTS

- 1 企画展紹介 「ミュージアムパーク30年のありったけーいつも茨城県自然博物館はおもしろい!」
- 2 特集 博物館職員の活動日記⑥/館長コラム
- 3 研究報告1 博物館のキノコリストが完成しました! / MCの小さな発見
- 4 研究報告2 那珂湊層群から初! 生痕化石 *Archaeozostera* を報告 / おさかな通信
- 5 なるほど博物館/収蔵品紹介
- 6 トピックス
- 7 いちおしトピックス! / 今後の企画展紹介



昨年の11月2日に第91回企画展「ミュージアムパーク30年のありったけーいつも茨城県自然博物館はおもしろい!」がオープンしました。当日は、多数の応募の中から抽選で選ばれた6組の子どもたちがくす玉割りを行いその後大勢の人が企画展示室へと進んでいきました。

企画展紹介

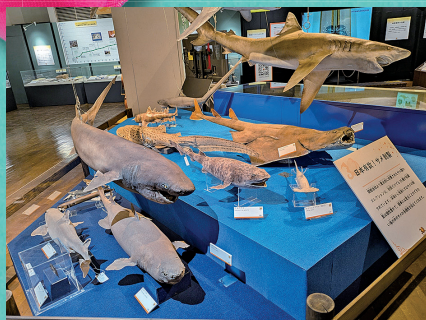


ミュージアムパーク 30年のありったけ
— いつも茨城県自然博物館は面白い！ —

30th Anniversary, Special Exhibition

— Amazing world of Ibaraki Nature Museum —

会期/2024 年11月2日(土)～2025 年6月1日(日)



絶賛開催中！！2月にはリニューアルします！

昨年の11月2日にオープンした「ミュージアムパーク 30年のありったけ—いつも茨城県自然博物館は面白い！—」が絶賛開催中です。

子どもたちが目を輝かせている一番の人気展示は、過去の人気体験展示カムバックコーナーの「ごきぶりホイホイ体験」です。あまりの人気で床のマジックテープが剥がれてしまうハプニングが起きたほどです。そのほかにも、「触れる展示」や「移動博物館がやってきた！」の体験ができる展示は子どもたちに大人気です。

一方、大人は、棚に所狭しと並んだ動物の剥製、キラキラ輝くアメシスト、恐竜などの大型骨格標本、大人の身長よりも大きな葉っぱやブナの模型などに足を止めて見入っている人も多いようです。

いろいろな楽しみ方ができる「ありったけ」は、2月22日(土)に一部展示の入れ替えを行いリニューアルオープンします。新しい「ありったけ」も期待していただきたいですが、その前に今の「ありったけ」を見られるのもあと少し！

もうすでにご覧になった方も、友達や家族、同じ職場の方やご近所の方などに声をかけて一緒にもう一度訪れてみてください！お待ちしております。

(教育課 佐藤一康)

当館に隣接する菅生沼は、昭和50年より自然環境保全地域に指定されており、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に掲載されているタチスミレやトネハナヤスリなど、希少な植物も生育しています。

菅生沼は私にとって、まるで冒険の舞台のような場所です。今年度から植物研究室に所属し、この沼の植物相を解明するための調査を行っています。研究室のなかまとともに、植物の名前や特徴を調べながら、植物の体のつくりの多様性に感動しています。

水辺の調査では、胴長を履いて泥の中へ。ヨシやマコモの群落に分け入ります。ときには泥に足を取られてしまい、抜け出すためになかまたちに手を貸してもらうこともあります。自分の身長よりも高いヨシやマコモの群落をかき分けながら進むことも、日常では経験できない貴重な体験です。また、当館のこれまでの調査では足を踏み入れていないところにもボートで入り、新たな発見がある度にわくわくします。ヨシやマコモの群落の中に、また別の種類の植物を見つけたり、タチスミレが生育しているような環境の場所を発見したりするのは喜びの1つです。

春には、毎年野焼きを行っている場所を調査しました。絶滅危惧種のタチスミレの生育を確認できたことは大きな喜びでした。同じく絶滅危惧種のシダ植物であるトネハナヤスリもたくさん見つけました。その可愛らしい姿に心を奪われました。



菅生沼での調査のようす

夏の調査では、センニンソウやシロネなどの美しい白い花が多く見られました。一方、3メートルほどの大きさになった外来種のオオブタクサには圧倒されました。また、綺麗な花を咲かせたつる性の植物を見つけ、その特徴を見ようと葉をとってみると、独特なおいがして顔をしかめました。ヘクソカズラでした。

秋の調査では、クズの甘い香りが辺りに漂い、秋の訪れを感じました。ノイバラやイシミカワのとげにひっかかりながら植物の群落に分け入っていく中で、ツチイナゴやカヤネズミの巣を発見しました。調査を終えると、服にはアレチヌスビトハギの実がたくさんついていました。

このように、菅生沼調査では自然の豊かさを感じることができました。

今後は、菅生沼の調査を継続し、全体の植生図を作成する予定です。30年前の植生図と比較することで、菅生沼の植生がどのように変化しているのかをより詳細に把握し、その変化の原因を解明したいと思います。

菅生沼は、私にとって単なる調査の場ではなく、自然と触れ合い、学び、そして感動できる場所です。これからも、この豊かな自然を守り、次世代へと引き継いでいきたいと思います。

(教育課 豊崎賢二)



野焼きをした場所に生えるトネハナヤスリ

館長コラム by director Yokoyama 30年前の岩石展示

当館2階に、「岩石ができるところ」という展示があります。これは、太平洋の東部からハワイ、日本列島を通り、大陸に至る地域の断面図に陸上で採取されたさまざまな岩石をはり付けた展示です。当館がまだ開館していない30年以上前に、当時国立科学博物館で勤務していた私が頼まれて作製した展示で、地表付近や地下深くのマントルなど、岩石がもともとはどこでできたのかをわかりやすく示しています。

この「岩石ができるところ」と同じ展示は、もともと35年前に国立科学博物館(新宿分館)の新しい建物に設置するために作製しました。新宿分館は平成24年につくばに移転してなくなりましたが、この展示は、上野本館の日本館3階に移されて、今も当館と同じ物が展示されています。作製した当時は、プレートテクトニクス理論が確立されようとしていた時代です。展示では、この考え方に基づいて太平洋のハワイから移動してきて、海溝部から日本列島の地下深くへと沈んでくるプレートが表現されていますが、修正するところがなく、当時を思いおこすと今でも私が手がけた自慢の展示になっています。



博物館の キノコリストが 完成しました！

当館が誇る約16haの野外施設には、四季折々にたくさんほこのキノコが生えます。当館では、ボランティア「きのこチーム（現きのこけチーム）」を中心に、開館間もないころから野外施設内のキノコの調査を継続して行ってきました。その結果は2011年にまとめられ、292種のキノコが報告されています。その後も調査は行われ、新たなキノコが続々と見つかりました。そこで、2023年までの調査をまとめて、博物館の新たなキノコリストを作成しました。この12年間の調査で新たに見つかったキノコは135種で、誤同定だったものなどを除き、合計425種が博物館で確認できたことになりました。

ボランティアの皆さんの調査のようすを覗いてみましょう。調査は月1～2回の頻度で行われ、来館者の少ない朝方からはじまります。野外施設に点在する5か所の雑木林（つたの森、くまざさの森、どんぐりの森、昆虫の森、野鳥の森）を中心に、野外施設全域をくまなく歩いてキノコを探します。リストをまとめることを決めた2022年には、キノコが多く観察される5～11月の調査を月3～4回にふやして、さらに詳しく調査を行いました。キノコを見つけると、写真とメモで記録を取り、はじめて見つけたキノコや名前の分からないキノコは、標本にするために採集をします。いくつかの不明種の標本は、慶應義塾大学の糟谷大河博士に同定していただきました。

調査と同定の結果、茨城県ではじめて見つかった種類が7種もあることがわかりました。ナガミノツルタケ、ニカワラッシタケ、コキララダマシ、シロヒメツツタケ、キツネカワラタケ、アカハニセクロハツ、ア

シブトアミガサタケです。ニカワラッシタケは、今回の発見により北限が茨城県に更新されました。シロヒメツツタケは高さ0.5～2mmのとても小さなキノコで、これまで北海道、神奈川県、京都府の3か所のみに確認されていました。このような小さな珍しいキノコを発見することができたのは、ボランティアの皆さんの綿密な調査の賜物です。

キノコの調査は今後も継続していきます。続報をぜひお楽しみに！（教育課 鵜沢美穂子）



キノコの調査のようす



茨城県新産のニカワラッシタケ（撮影：北沢弘美）

論文：北沢弘美・牧野純子・真藤憲政・今村 敬・稲葉義智・糟谷大河・鵜沢美穂子。ミュージアムパーク茨城県自然博物館構内における大型菌類リスト・補遺。2023。茨城県自然博物館研究報告（26）：63-86。



ミュージアムコミュニケーター

MCの小さな発見

ヒトデの足の使い道

第3展示室の水槽をのぞいてみると、時折ヒトデがガラス面にくっついているときがあります。その際、からだの裏側を観察してみると、透明な管のようなものがウヨウヨと動いているのがわかります。これがいわゆるヒトデの足で、「管足（かんそく）」とよばれています。管足の先端は吸盤のようになっているので、岩場やつるつるとしたガラス面でも落ちずにくっつくことができるのです。

この管足の使い道は意外にも幅広く、自然界ではさまざまな役割を果たしています。歩くことはもちろんですが、からだがかたまり返ってしまったときに自力で起き上がるためにも使います。ときには、エサとなる2枚貝の閉じた殻を管足でこじ開け、中身を食べることもできるのです。

みなさんもヒトデを見つけたら、動きに注目しながらよく観察してみてくださいね。

（ミュージアムコミュニケーター 石川優里）



ヒトデの管足のようす

那珂湊層群から初！ 生痕化石 *Archaeozostera*を報告

化石には、骨・歯・貝殻など古生物のからだの一部が保存された体化石と、足跡・這い痕・巣穴などの生活の痕跡が保存された生痕化石があります。体化石に比べて、生痕化石の研究の数は少なく、論文や書籍も非常に少ない状況です。しかし、過去の生物がどのような生活をしていたのかを知るためには、生痕化石が不可欠であり、これらの調査・研究は重要な意味をもちます。

このたび私たちは、ひたちなか市の海岸に露出する那珂湊層群礫層（白亜紀後期の地層）から *Archaeozostera*（アーケオゾステラ）という生痕化石を発見しました。那珂湊層群の生痕化石としては、*Hitachia nakaminatoensis* Hatai and Noda, 1972 に次いで 2 番目、礫層の生痕化石としては初めて分類が検討された例になります。

今回採集したアーケオゾステラは、砂岩ブロックに含まれており、層理面と平行な平面上に 8 本のトンネルが放射状に見られました。それぞれのトンネルは幅が 20mm 程度で厚みは 1 mm 程度の平らな形をしています。トンネルは黒色の泥質の堆積物で満たされています（図 1）。

これまで、アーケオゾステラの化石のほとんどは関西の和泉層群および宇和島層群から産出しており、そのほかの地域の報告例はごくわずかです。産出地域および年代が極めて限られています。また、アーケオゾステラは一見すると植物に似ていることから、かつて植物化石として記載され、形態的特徴および推定された堆積環境からアマモ科の祖先として解釈され「コダイアマモ」という和名も与えられました。しかし、近年

の研究により、アーケオゾステラの全体の形態が復元され、深海の堆積物中の細かな有機物を食べる生物によって形成された生痕化石であることが明らかにされています。那珂湊層群で発見されたアーケオゾステラは、放射状に配列したトンネル同士が重なり合う特徴や一部のトンネルが直線状に伸びる特徴から、アーケオゾステラ形成者が成長して大きくなった段階の生痕であると考えられます。

今回新たに、那珂湊層群からアーケオゾステラが産出したことで、那珂湊層群と和泉層群、それぞれの地層が堆積した海底に同様の生痕を形成する生物がいたことを示す新たな知見が得られました。今後も調査を継続し、那珂湊層群の生痕化石の研究をさらに進めていきたいと考えています。（教育課 村田一弘）



図 1 *Archaeozostera*（ひたちなか市 / 那珂湊層群）
左が上側、右が下側のブロック



図 2 *Archaeozostera*（大阪府泉南市 / 和泉層群）

論文：村田一弘・松尾武祥・加藤太一（印刷中）。茨城県ひたちなか市の上部白亜系那珂湊層群礫層から産出した生痕化石 *Archaeozostera*。茨城県自然博物館研究報告（28）。

おさかな通信

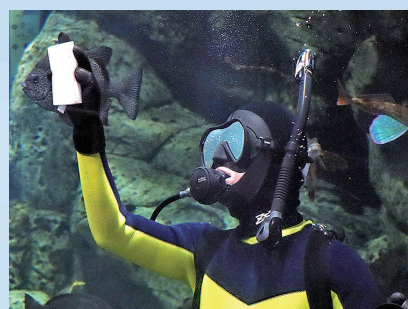
潜水掃除が病気予防に

今回は飼育員の仕事の 1 つである「潜水掃除」について紹介します。当館の第 3 展示室には久慈川水系をモデルにした水槽があります。私たちは潜水機材を身につけて、その水槽を定期的に掃除しています。

水槽に入る際には、魚を驚かせないように気を配ります。水槽の亚克力ガラスや岩には藻類などが生えるため、傷がつかないように、スポンジやブラシで磨きます。また、網を使って水槽の底面に落ちている餌の残りや糞も回収します。これらを放置してしまうと、水力ビなどの真菌や有害なアンモニアがふえる原因となり、魚の免疫が低下して病気になる可能性が高くなります。そのため、見落としがないように徹底しています。

潜水掃除は水槽の見栄えをよくするだけではなく、魚たちの健康を保つための大事な作業です。これからも、魚たちが快適に過ごせるような環境づくりをしていきたいと思ひます。

（水系担当 安藤雅輝）



潜水掃除中のようす

なるほど 博物館

いばレックスとコティランが
自然に関する情報を
わかりやすくお伝えします。

「ミシシippアカミミガメ」

(資料課 吉田 佑) イラスト:ツク之助



子ども(左)と大人(右)の比較



いばレックス

左のカメさんは小さくてかわいいね。

ミシシippアカミミガメの子どもだよ。「ミドリガメ」という名前でもよばれることもあるね。

右のカメさんが大人のすがたなの？

そう。耳のあたりに赤いもようがあるね。だから「アカミミガメ」と名前がつけられているんだ。



コティラン



耳のあたりにある赤いもよう

カメって水の中にいると思っていたけど、この前地上を歩いているところを見つけたよ。

よく見つけたね。それはきっとメスのカメだよ。メスは春から夏にかけて産卵のために陸にあがって、土の中に卵を産むんだよ。

そういえば、なんでこのカメは「ミシシipp」なんて名前なの？

「ミシシipp」はアメリカの地名なんだ。このカメは1950年代後半、日本にもち込まれたんだよ。以前は子ガメがペットとして売られていて飼っている人が多かったんだ。でも、大きくなると世話しきれなくなって捨てられたりして、野外にすみつくようになったんだ。そして、2023年6月から野外に放すことが禁じられたんだよ。
(条件付特別外来生物とよばれる生きもの)

生きものを飼うときは、最後まで責任をもって飼わないとね。



収蔵品紹介

川名美佐男氏 日本産陸・淡水貝類コレクション

60年以上、日本を中心に陸・淡水貝類を収集してきた貝類研究者の川名美佐男氏より、2023年3月、日本産陸貝類標本6,381ロット※を寄贈いただきました。このコレクションは約740種(亜種を含む)で構成され、日本の陸貝類の全種数の70%以上をカバーしています。特に、日本に生息する大型の陸貝類であるマイマイ属の全種が含まれていることはこのコレクションの大きな特徴になっています。

さらに、2024年3月、日本産淡水貝類標本295ロットを寄贈いただきました。このコレクションは85種で構成され、中型～大型種のほぼ全種が揃っています。また、絶滅危惧種も含まれ、中でも埼玉県では絶滅したとされる埼玉県産のカワネジガイの標本はたいへん貴重です。

企画展「ミュージアムパーク30年のありつたけ」(令和7年6月1日まで展示)と常設展「博物館のコレみて！」(令和7年1月末まで展示)で川名美佐男氏日本産陸・淡水貝類を紹介しています。この機会にぜひご観覧ください。(資料課 池澤広美)

※ロット：同じ日、同じ場所で採集された同一の種類をひとまとめでした標本の単位。



企画展「ミュージアムパーク30年のありつたけ」での展示のようす



常設展「博物館のコレみて！」での展示のようす

茨城県産昆虫目録の発刊

ミュージアムパーク茨城県自然博物館では、茨城県内の動物・植物の分布・生態・生息環境の特性・地質・気象などの地学的特性を把握するため、自然史資料の集積を図ることを目的とする“総合調査”を実施しています。

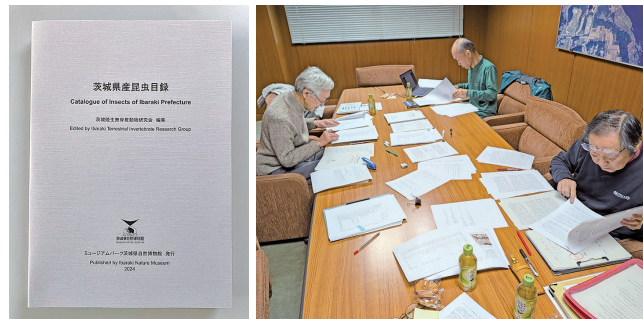
当館では総合調査を進めるために、茨城陸生無脊椎動物研究会のメンバーとともに1994年の第1次総合調査から、茨城県の昆虫類やそのほかの陸生無脊椎動物のファウナ※を調査してきました。今回、これまでの調査結果をまとめ、「茨城県産昆虫目録」として茨城県で記録された昆虫類を報告することができました。本目録で収録した種数は、515科9,568種です。この種数は1993年に水戸市立博物館が発行した「茨城の昆虫」と比べて約2倍に増加しており、その間の関係者の精力的な調査の足

跡が偲ばれる結果となりました。本県の昆虫相の解明に大いに貢献できると確信しています。

本目録発行にあたり、総合調査に参画した多くの調査員の地道な調査研究に感謝するとともに、本書が各方面で広く活用されることを願っています。

(資料課 久松正樹)

※ファウナ：ある地域の動物のすべての種類のこと



茨城県産昆虫目録(左)と編集作業をしているようす(右)

移動博物館 植物の資料が加わります！

当館では、茨城県内の学校や公共施設にて博物館の収蔵品を展示する「移動博物館」を実施しています。

植物分野の展示資料には身近なアブラナやツツジの花の拡大模型、本物のキノコそっくりのレプリカなどがあり、普段じっくりと観察する機会のない植物や菌類の姿を間近で見ることができます。タネの展示資料では、「動物に食べられる」「翼で飛ぶ」「はじけて飛ぶ」など、生活範囲を広げるためのさまざまな方法がまとめてあります。

また、五感を使って楽しめる展示資料もあります。さまざまな種類の木からつくられた木琴では実際に叩いて、木によって音がどのように違うのかを比べることができ、パズルでは木の色や重さ、硬さの違いを体感できます。

そして、この度タネとドングリの新たな資料が加わり

ます。これまでの資料とは違った飛び方をする「翼でとぶ」や日本のタネとは形や大きさが違う「外国のタネ」などが加わりました。クヌギのドングリ拡大模型は、触れる展示資料です。これらは、企画展「ミュージアムパーク30年のありったけ」に展示されています。ぜひご覧ください。

(教育課 豊崎賢二)



新しいタネの標本箱「外国のタネ」

身近な外来種を見てみよう！

第5展示室「人間と環境」に新しく外来種のコーナーができました。“外来種”という言葉はよく耳にしますが、その動物の見た目や植物の形などをじっくりと見る機会はありませんのではなないでしょうか。

今回のリニューアルでは、動物にアライグマとクリハラリス(台湾リス)、植物にはオオバナミズキンバイを含む水辺の植物3種を展示しています。これらの生きものはもともと日本には分布しておらず、人の手によって海外から持ち込まれたと考えられています。「かわいらしい」や「きれい」などさまざまな理由で持ち込まれたこれらの動植物が今、どうして脅威になっているので

しょうか。

このコーナーは令和6年10月に展示替えを行いました。まだご覧になっていない方は、ご来館の際に、標本で姿かたちを観察していただき、私たちの生活や生態系の中で日本にやってきた外来種がほかの生きものに与えている影響、これからの日本の自然の姿などを考え、ぜひ皆さんで話し合ってみてください。(資料課 鈴木亮輔)



人の手によりもち込まれたアライグマ(左)とオオバナミズキンバイ(右)



30歳になりました！

平成6年11月13日に開館した当館は、今年度30周年を迎えました。30年という節目を迎えられたのも、ひとえに皆様のご支援のおかげです。

人間にとって「30歳」は特別な感じを覚えますが、博物館の「30歳」も…感慨ひとしおです！

30th Anniversaryをみなさんとともに楽しみたいと思い、特別な企画をご用意。

まず企画展について。11月2日(土)にオープンした「ミュージアムパーク30年のありったけーいつも茨城県自然博物館はおもしろい！ー」では、いつもの1.5倍の面積を使い、約7か月のロングランで公開します。とっておきの資料や30年の振り返りを存分にご堪能ください。2月には大幅な展示替えも予定しておりますので、会期中何度も楽しみいただければ幸いです。

また、自然ラボなどのイベントについても、30周年という特別な年にふさわしいスペシャルイベントを計画しました。詳しくは、当館ホームページをチェックしてみてください。

さらに、当館の展示物の中で人気の「動く恐竜(T.rex)」がデザインされた記念メダルが登場！メダルの裏面には30周年企画展記念ロゴがデザインされています。

これからも多くの方々に楽しんでいただける博物館を目指してまいりますので、変わらぬご支援をよろしくお願いします。(企画課 川村詩音)



企画展「ミュージアムパーク30年のありったけ」で子どもが楽しんでいるようす

今後の企画展紹介

恐竜とともに生きた生物たち ～ぼくらは脇役じゃない～

2025年7月5日(土)～2025年9月15日(月・祝)

恐竜は非常に人気で、博物館の展示や書籍、映画、おもちゃ、Tシャツなどでよく見かけます。しかし、恐竜と同じ時代に生きていた植物や昆虫、哺乳類、貝類、魚類などは、『背景』や『脇役』として扱われがちです。そんな『恐竜じゃない生きもの』について、ディープに解説します。

右の写真は、恐竜時代のイチョウの葉の化石です。現在では街路樹などとしてなじみ深いイチョウですが、恐竜時代の森林を構成する重要な植物の1つでした。このように、恐竜時代の生きものについて、化石を調べて解き明かしていきましょう。(資料課 加藤太一)



恐竜時代(中生代ジュラ紀)のイチョウ

編集後記

春は桜、夏はホタル、秋は紅葉など、博物館の野外を歩いていると季節によって、まったく異なる生き物や植物を観察することができます。そして、冬はなんといっても菅生沼に飛来するコハクチョウの観察です。当館にお越しの際には、ぜひ野外観察を楽しんでみてはいかがでしょうか。(S・K)

【開館時間】9:30から17:00まで(入館は16:30まで)

【休館日】毎週月曜日

※休館日は異なる場合がありますので、事前にホームページ等でご確認ください。

URL <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会

入館料が無料 & 限定イベント多数！

家族会員	4,000円	個人会員	3,000円
子ども会員	1,000円	賛助会員	10,000円

※特典：イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しみ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。